

特集

【歩行障害・認知症と LUTS】 正常圧水頭症をともなう 下部尿路機能障害

有賀誠司¹⁾ 桑名信匡²⁾ 井川靖彦³⁾

あるがクリニック¹⁾ 国家公務員共済組合連合会東京共済病院脳神経外科, 正常圧水頭症センター²⁾
東京大学大学院医学系研究科コンチネンス講座³⁾

Key Words 特発性正常圧水頭症, 尿失禁, 過活動膀胱, 脳脊髄液シャント術

特発性正常圧水頭症 (idiopathic normal pressure hydrocephalus ; iNPH) は高齢者に多くみられ, 歩行障害, 認知症, 尿失禁を三徴とする疾患で, 脳室拡大は認めるものの, 脳脊髄圧は正常で脳脊髄液シャント術により三徴症状の改善が認められることから, 治療可能な認知症として注目されている。下部尿路症状 (lower urinary tract symptoms ; LUTS) は主に, 尿失禁のみでなく, 頻尿・切迫感など過活動膀胱 (overactive bladder ; OAB) の症状を呈する。三徴の術前後の臨床症状評価は歩行障害, 認知症については客観的評価がなされてきたが, 下部尿路機能障害 (lower urinary tract dysfunction ; LUTD) に関してはこれまで, LUTS を患者本人もしくは家族から聴取する, いわゆる主観的評価方法により行われてきた。われわれは, iNPH 患者に対してシャント手術前後でウロダイナミックスタディ (urodynamic study ; UDS) を行い, 膀胱機能の手術による変化を客観的に評価した¹⁾。本稿では, これらの結果と過去の報告をあわせ, NPH 患者の LUTD の特徴につき解説する。

はじめに

日本は超高齢社会へ向かっており, 今後, 高齢者に対する介護の必要性はさらに増してくる。特に, 尿失禁を含む LUTS は介護する側, される

側の双方で大きな問題となるが, これに認知症や歩行障害がともなって発症するとなると, 介護側の負担はより大きなものとなる。これらの歩行障害, 認知症, 尿失禁を三徴として有する疾患の 1 つに iNPH がある。

Seiji Aruga (院長), Nobumasa Kuwana (顧問・正常圧水頭症センター長), Yasuhiko Igawa (特任教授)